

◆過去問題に学ぶ 理事長解析 シリーズ1 「難関、全国通訳案内士試験を分析する」

True Japan School の皆様へ

本メールニュース購読の皆様には、今年度全国通訳案内士2次試験を受験して結果待ちの方、1次試験の結果で一部の科目が不合格で来年の再度受験を目指している方、来年初めて全国通訳案内士を受験されようと検討している方、その他さまざまな方がおられると思います。

その皆様に向けて、今日から、True Japan School 代表である米原亮三の「過去問題に学ぶ 理事長解析」シリーズをお送りします。

まずは何故、私が、試験問題の分析・解析をするのか、その理由と狙いを以下の3点について、お話しします。

第1に、試験問題に関する経験の長さです。私は、2009年以来、通訳案内士試験の指導に携ってきました。2010年には、日本地理、日本歴史、一般常識の3科目を自ら指導しました。その時、過去10年の試験問題を検討し、解析しました。

その後も、特定非営利活動法人日本文化体験交流塾(IJCEE)の理事長として、また、True Japan Tour 株式会社の社長として、通訳案内士試験を毎年、分析し、対応策を検討してきました。つまり、20年にわたる通訳案内士試験を分析し、検討しています。

第2に、全国通訳案内士試験の特徴です。全国通訳案内士試験は、多くの国家試験のなかで、最も出題内容の予想が難しい試験です。国内・総合旅行業務取扱管理者試験は、難しい試験ですが、攻略は可能です。試験の出題範囲が明確でかつ、法則性があります。過去問題を10年分勉強すると、攻略方法の7割方は、理解できます。

しかし、全国通訳案内士は、10年分過去問題を勉強しても、来年度の予想を行うことは、大抵の方には、困難です。

はっきり言って、法則性がほとんどないからです。問題の難易度もその都度異なります。一般常識が難しくなったり、日本地理が難しくなったり、気まぐれです。しかも難問奇問の続出です。誤った問題や解答のない問題さえ、毎年のように見られます。

第3に、1、2を元に山を張ります。このような全国通訳案内士試験ではありますが、私たち、True Japan School は、受験生にとっての、勉強の最短コースを研究しています。あえて、言います。私の特技は、「山を張ること」です。

適切に、山を張ることにより、受験勉強の時間を3分の1にして、成果をだすように努めます。自分のことで恐縮ですが、私は、東京大学理科一類と文科二類、早稲田大学、慶応大学、横浜市立大学医学部の5度の受験を全部合格し、大学受験で不合格の経験はありません。しかも、基本的には、どの試験も周到に「山を張って」受験しました。

私の趣味は、山に登ることですが、「山を張る」ことも得意です。この山を張る技術を、本メールにより、皆様に一部披露したいと思います。

さて、本論に戻ります。今年の日本地理と日本歴史の過去問題から学ぶことは、以下の8点です。

- 1 2008年～2020年の過去問題の分析
- 2 伝統的建築物群保存地区に注目
- 3 解答以外の選択肢から学ぶ
- 4 地学的思考がスタート
- 5 日本地理と日本歴史の役割分担とは
- 6 一つの地域の歴史問題
- 7 古代と中世と近世と近代
- 8 この3か年の傾向を読む

次回から、上記テーマについて1つずつ、お話ししたいと思います。

日本文化体験交流塾 理事長 米原亮三